

た。しかも、一方我が第二十軍は衡陽攻略戦で戦力が低下していたし、第十一軍を柳州、桂林方面より中・北支方面に兵力転用を命じられていた。したがって、芷江作戦を四川攻略に変更、敵の前進基地を覆滅、重慶軍の総反攻を破摧し、東主、西従の転換を可能なものとして計画どおり、四月十五日、第二十軍は芷江作戦を発起した。

しかし、中国軍は大部隊が空輸で芷江に増強され、我が軍の進撃速度は鈍化、湘桂沿線兵力撤収などから、芷江進出は困難と判断した。五月四日午後、軍は「第一百十六師団は一時重慶軍との決戦を避け山門―洞口付近に反転、同地周辺の要線を占領確保し、これを支拂とし所在の重慶軍を撃滅すべし」と命ぜられた。

歩兵第三百三十三連隊（体験執筆者松本氏所属）は五月四日、鉄山の頂上、青岩の最高峰の争奪をめぐり彼我激戦中であるが戦闘はわれに有利と判断されていた。

## 生と死の青春記録

新潟県 佐藤 藤吉

大正十三年生まれ、昭和十九年現役徴集。城川村立青年学校本科教育中、第三小隊長として軍事教練を受けていたが、入隊のため繰り上げて卒業式をした。「海征かば水漬く屍、山征かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、顧り見はせじ」と合唱して別れた。ラバウルで転進作戦、サイパン島、アッツ島など玉碎し、戦局暗雲の時期の出征。出発の靴を履くとき茶碗酒を注いでくれた父。神社前で出征の決意を述べたとき石灯籠に顔を隠した母。昭和十九年九月一日、仙台市の東部第二十七部隊野砲隊に入隊した。

野砲隊には宮城県、福島県、新潟県からの戦友で、軍装支給や「忠礼武信質」の五カ条の教育を受け、五日午前四時軍用列車で仙台駅を出発した。輸送指揮官丸山少尉以下六名の下士官の指示のもと、下関に七日

到着。「興安丸」で出帆、釜山着、五日二十三時大陸貨物列車に乗車した。

山海関国境を通過し徐州から浦口着、揚子江を横断して南京兵站到九日目に到着し、揚子江を溯航して長安教育隊には十一月八日八時に到着した。約三カ月余りで目的地に定住した。

鏡第十三師団山砲兵第十九連隊の初年兵現地教育が始まった。アンペラの壁で土間の板の上で勉強し、カントラの明かりで、朝鮮兵と共に、月月火水木金の叩き込みの連日である。支給品は員数と言って、無くすれば戦友のものを盗んでも合わせなくてはならない。無二の親友でもあり泥棒同志でもあった。

ビンタと言ってよく頬を殴られたが、奥歯を噛み締めているので、痛いと言うよりも痺れるが、頬の色が充血したり、唇が切れての後遺症が恐い。普通は往復ビンタである。風呂はドラム缶で、井桁に組んだ板を踏みながら入る。内務班長から古兵そして初年兵の順番で、兵は週二回が限度であった。便所は廁と言って、中国人たちに分からないよう、「かわや」とか「だい

きゆうないむはん」とひらがなである。

山砲兵は本科、観測、通信の三部門で私は通信兵となった。電話線の架設、敷設、埋設と電線の結び方と解き方、トットツのモールス信号と、イロハの手旗信号などの基礎訓練で、少しでも違えばビンタである。

ドラム缶を週番が叩く音で起床となる。日朝点呼は二百メートルぐらいの河原の真つ白く凍った霜の広場で、我れ先と早く飛んで行き、四列縦隊に六個班が並ぶ。点数を稼ぐには一番早く前列の右側に位置する。その右には内務班長が後から来て並ぶから顔を覚えらる。佐藤はいつも早いと言われるための努力である。

武昌近くであるから大陸性気候で、降る日晴れる日、三寒四温で昼と夜との温度差がひどい。日朝点呼に早く位置した者から上半身裸となり乾布摩擦をする。全員が揃うまで続けるが後半以下に位置すれば、半裸にならずに済む、早く進級したい欲望がわくのだ。

昭和二十年の元旦、長安教育隊にサイレンが響いた、93

空襲である。飯盒の中の餅を食べながら日向ぼっこをしていたときで、逃げるか伏すか又は蛸壺に避難する。機銃掃射の弾は親指くらいの太い弾丸で一メートル間隔に打ち込まれる。隣に起居し、また並べて造った蛸壺に落下傘爆弾が直撃して、佐渡出身の谷地田君が粉砕された。私は内務班長の当番だったので第十一内務班長殿へ回覧を持って行き命拾いした。

蛸壺は頭が少し隠れるほどの深さであるが、背から腹にかけて貫通した長尾古兵や、太股を打ち抜かれ、ヨードチンキを流し込んで冷水舗野戦病院へ送られた戦友もあった。運命は一寸先が闇と思った。

第一期検閲近くに命令が出て、一つ星の襟章を白い糸で二つ星にせよとのこと。日朝点呼場に全員が整列した。「気を付け頭中、申告します。陸軍二等兵佐藤藤吉以下一千百十六名、昭和二十年二月二十日付をもって陸軍一等兵に進級を命ぜられました」進級申告したこと男子の本懐であり、銃後の父や母に見せてやりたかった。

その一週間後に右足裏に底豆ができた。我慢がなら

ず真夜中に内務班付衛生上等兵に頼んだら、メスで足底の皮を切り、ヨードチンキを塗ってくれた。痛い。夜中で声も出せず死に者狂いだっただが、お陰で回復し、編上靴を履けない内は舎内監視であつた。

二回目の空襲を受け、教育隊が破壊された翌日の二十二時本隊追及の作戦行動が開始された。思えば十一月八日から次年の三月十五日までの第一期検閲、懐かしの長安を後にした。

山砲兵であるため鞍馬ばんばと共の行軍であり、昭和十八年からは制空権は敵の手にあつたために夜行軍である。飯盒炊さんの煙は目標になり、洗濯物は軍人の位置表示である。朝食後二食分を用意しておく。行軍は四十五分、十五分の休憩であるが軍馬に必ず水を飲ませねばならぬ。衛生兵が検疫してから水汲みして、馬に水をやる。休む暇はない。

生の水を飲めば必ず下痢をして血便が出る。アメーバ赤痢と言った。飯盒でお湯に沸かしてから飲む。冷まして飲む。そのお湯を冷ますと飯盒の底に五ミリくらいの石灰のような白い物が残る。ましてや敵中の土

地で入毒してあるやもしれず、故郷の井戸水が恋しいのである。

公路を駄馬部隊、重機の進軍で、「爆音」の発声があれば道路は白く光っているので道を空けねばならぬ。重機を背負ったり引いたり軍馬はすぐには間に合わず、機銃掃射の目標となり損傷や死者が出る。爆音は必ず敵機である。中国戦線は不敗だから友軍機はビルマや南方へ出撃しているとのこと。

夜行軍の先発隊が先行して次の宿泊地を掌握してある。雨期に入ると赤土の泥が膝まで埋もれる。煙草や乾麵包など濡れて役に立たず、睡眠をとるも、上衣や股下など交換品がない。涙と汗と泥そして軍馬の手入れである。

長沙を越して福田舗に滞在中に大隊の医務班が敵襲を受けた。連絡のために二名が村から出発したらすぐに村から狙撃され、田の中に落ちた。熊倉戦友即死であった。土壁の民家の窓にはどの家も顔を出している。銃口を向けても身動きせず、危険区域とのことだったが、士官以下兵が十名戦死した。

昭和二十年五月二十三日、衡山付近に到着したら反転命令が出た。独、伊両国が降伏したので、また同じ道の夜行軍が始まった。状況が悪いせいか後続の兵が来ないので、終始初年兵である。戦死の外に赤痢、マラリア、蛔虫、行方不明等で多数の戦病死者が出ている。また赤土色した絨衣、錆びてゆく銃機、栄養不足で頬のこけた戦友、しかし、必ずや勝つ自信だ。

路口の土地塘に滞在中、命令受領の戦友が連隊本部の様子では、日本は降伏したらしいと、**秘**情報を聞いた。秘密情報が次々と波紋となって、小隊長の耳に入ったのである。すぐ呼び出されて殴る蹴るの暴行で、瀕死の状態となり入院した。神国日本は負けるなど絶対に有り得ないと言う。私共初年兵？は実戦には参加していないが、中国戦線では実際に敗戦はない、大日本勝利のために苦勞を惜しまない。

その日の夕方から土地の住民（チャンゴ）が、私ともが横領して居住しているこの家（ファンズ）の窓口に蠅のごとく顔を出す。向こうへ行けと「ツォツォ」と叫んでも笑顔を崩さず薄気味が悪い。そして二日目

の昭和二十年八月十七日、単独の軍装で日朝点呼に集合せよとのこと。下痢をしてウジがわいて動いている溝の廁へ、血便を絞り出して軍装した。輸送指揮官から「忍び難きを忍び」の停戦の大詔が伝達された。

列を乱して泣く者、抱き合う友、またそんな馬鹿なことはないと叫ぶ古兵、天地がひっくり返る有様、実際に勝負が逆転したのである。大詔には祖国再建とお言葉もあったが、気の遠くなるほどの遙かな祖国、故郷が目に見えなくなった。生きていたろうか父と母、そして家族たち。海を越えての大陸から。また武装解除後の保身、喜びと不安が交錯する。衰弱しているこの命何百万人の軍人が復員船を待つが見通しは？

本隊追及の行動は依然として続く、八月二十日武昌付近で武装解除された。丸腰、無防備の状況で敵中の生活が始まった。各自所有の三八式又は九九式歩兵銃は、金物や銃剣などで完全に菊の御紋章を削り取らねばならぬ。妻や子供を銃後に残してきて、大陸の赤土に埋もれた戦友、兵器として命より大切な菊を削った。徴収した民家に住むとすぐに「宮城」の貼紙をして、

目覚めには礼拝して毎日を励んできたのだ。

敗戦後の生活で軍人精神が緩んできた。ピントを食うとシヤキツとしたが、涙が出てくるようになった。

歩兵第十九連隊に追及し、連隊本部、各三個大隊、その中に各中隊及び段列があり、私は第二大隊本部に編入された。

食事は一日二食で飯盆の蓋に一杯のお雑炊である。糧秣受領を受けての生活で、軍曹以下十七名の日輪兵舎から毎日五名くらいが使役として労役に出された。クリークの泥さらい足踏み式の米搗きや、石臼を回しての粉引きなど、一日中働いても労賃は出ない。しかし、夕食にはチャン酒が出て腹一杯食べられる。十七名分の食事を五名引いて十二名で、お雑炊が食べられる。中には要領のよい古兵が日暮れになると、野菜畑に忍びこみ菜種の葉を抱えてくる。日輪兵舎の中央にある囲炉裏の鍋で水煮をして夜食をする。夕方になると顔馴染の老人が水キセルを吸いながら訪れる。油断はできない、監視に来るのである。悪いことではあるが背に腹は替えられない。

兵器である軍馬返納が行われることになったが、頑強な兵が出動して何日ぐらいで返納往復したのであるか。同じ村の風間古兵は出動して待遇が良かったと、復員後に聞いた。

会う度に風間さんと眼鏡橋で有名な湖口地区に集結したことを懐かしく話す。各部落ごとにクリークと言つて大きな池が一つずつある。人家は土の煉瓦を積み重ねて造つてあり、その土を採取した池である。また飲料水を汲み取る場所の反対側には、平らな石が幾つも据え置かれてあり洗濯場である。衣類など水に浸しては折りたたみ繰り返しは棒で何回も叩く。衣類は男は青色、女は白色が多く、洗濯好きのようだ。

食事は大鍋で炊き、油炒めにしてピーマンや唐辛子などのお菜をお茶碗に載せて、外へ出て食べる。話合いながら食べる。食事ができる幸せを表す行為のとこと。日朝点呼の不動の姿勢と、饒舌しながら食事をしている光景はやはり民族的な違いかもしれない。

長い熾烈な生活から負けた意志か、私も初年兵から次々と逃亡者が出た。二日間捜索するが、ほとん

ど二、三日中には必ず逮捕される。盗んだ衣服や金品のあるうちはよいが、物が無くなると相手にされず、路頭に迷う。また大陸惚けや、脳軟化症も増えてきた。敗戦のためか中国人の住居から追い出されたので遠く山岳地帯に行き、樹木や茅などを伐採してきて、日輪兵舎を造つた。二月の末ころの寒波のためか、四十度を超す熱を出した。医務室に行き診察を受けたらマラリヤとのこと、すぐに三月十日野戦病院に入院が決定した。

丘の上にある二棟建ての病院で寒さのために大部屋に火鉢があつて、煙草の吸殻入れにも利用した。土間の両側に藁が敷かれて、その上に自分の毛布を敷いて休む。夜になつても早く寝る人はいない。一番遅く休むようにする。この三月の寒さの部屋に蚤みづがわくほど住んでいる。遅く寝て自分の毛布で、首の所を確かと結んで休む。すると次々と来る大きな蚤は、やがて体の衣服の中に入る。痒い所を指で押さえるとすぐに捕らえられる。そして歯で噛み潰して二十四くらいまで覚えていたが疲れて眠る毎日である。また衣服の縫目

には虱シシムの卵が並んでいて、体温で育つのか寒さの中で動く。日中は飯盒で煮沸するが、お隣さんからお互いに頂戴する。

山道を歩き日向ぼっこをしながら草人参や、すみれ、時には蛙を捕まえて、塩気無しで飯盒で煮て食べる。歩けば足に蚤が食い付く。

週に一回瘦せた者が三人軍医の前に、素っ裸で並ぶ、うち二人は兵站病院行きで一人は残る。二回目に合格？して護送患者となり、九江行きが決定した。病院の入口には患者が整列して、革類を除き全衣類を毛布に包む。新しい白衣に着替えた夜は、極楽浄土に來たようでぐっすり眠ることができた。

十カ月の抑留生活、入院生活からいよいよ上海発が確定した。あと二カ月、指折りして近づくともた一カ月とのことだった。毎日病院の使役で屍の処理作業していたが、列車で上海行きが決まり無蓋車に乗った。上海埠頭の広場で所持品の検査があり、靴の紐を外し、全衣類の釦を外して天幕の上に並べ、両手を挙げて二人の検査官の來るのを待つ。貴重品は隠しておかない

と取り上げられる。二年有余で初めて日本女性を見た。看護婦さんの集団で肉付きのよいのに驚く。

六月一日上海からLSTの病院船に乗り出航した。

体重四十キロ、腕は骨だけで軽く握れる。船底に休んでいるが時々甲板上がり太陽を浴びる。博多港まで七日間とのこと。祖国の土をあとわずかで踏むと言う所で、私と同じ栄養失調で二人の戦友が屍となった。毛布にキリリと結ばれて、船べりの上に海に向けて安置される。放送があつて上がれる者は甲板に出て礼拝せよとのこと。僧職の経験のある軍人の読経が終わると、一分間の汽笛が鳴る。鳴り終わると片方を持ち上げて海へドボン。この水葬に二回礼拝した。

甲板で海を眺めていると、船乗りが私の胸に付けてある「新潟佐藤」の標示を見て、煙草を一本くれた。新潟のどこか？長岡は分かるが小千谷は知らぬと、君はあと二、三日で上陸だが、それまでは持たないと言った。疲労していたし顔色も悪かったらしい。

博多沖に停泊して検査を済ませて、昭和二十一年六月七日、日本に上陸、土地を踏みしめた。上陸するま

では貴様も俺も同じ日本人だと言うことで殴り合いが度々あったため、内地上陸までは襟章は外さぬことにしていた。

中国で使用した金銭は百円に対して日本円は十八円だった。日本円に兌換して買った鯛が一匹十円であった。故郷行きと病院行きの希望提出があり、衰弱していた体故に東京の国立大蔵病院行きとし、軍用列車のときは逆に上り客車で、沿線の都市の焼野原跡を見て敗戦を実感した。東京から実家と町の叔父あてに、新発田国立病院行きで小千谷駅停車を知らせた。変わりになき小千谷駅、駅員に依頼して背囊を下ろして発車したら、日本通運の倉庫脇に二人が立っていた。父母だ、窓から乗り出して手を振り別れたが、次の汽車で梅干の入ったお握りなどを持って、病室に入り、死亡したと思っていた母と抱き合った。

下痢が止まらないので、富山の配置薬から腹薬と虫下し用のセメン圓など頼んだ。持参してくれた薬を呑んだら、便所に行き水便と共に蚯蚓（蛔虫）が何回も出て、三十匹くらいまでは数えられた。大陸からの

持参品であった。それ以後、目に見えて回復して、昭和二十一年九月、村祭りの十五夜に、無事復員帰郷することができたのである。

## 我が青春の記録

静岡県 中瀬 高

中瀬広吉の長男として大正八年六月十五日、静岡県富士郡鷹岡村厚原九七九番地に生まれる。家族は父母と十二人の姉弟、私は第二子で、長男は早逝した。

昭和十四年一月十日、現役志願をして、名古屋騎兵第三連隊へ入営した。馬は入隊前から乗っていたので自信はあったが、二月二十日、名古屋市外小幡カ原演習場で乗馬、襲撃訓練中に隣馬に跳ねられ、右足脛骨骨折、二月二十一日より名古屋陸軍病院に入院、六月三日全快したので原隊復帰。よって下士官候補志願は断念した。

昭和十四年八月二十二日、一等兵に進級。